

◇日本社会と憲法～法学館憲法研究所リレー対談 最終回・レポート◇

政治と憲法 — 選挙制度・政党のあり方 (2012年11月4日)

森 英樹 氏 (名古屋大学名誉教授) × 浦部法穂 氏 (法学館憲法研究所顧問・神戸大学名誉教授)

民主主義の出発点。66年前の11月3日、新憲法が公布された。翌日発行された朝日新聞の記事の引用から講演はスタートした。冒頭から新聞というリアリティを提示してもらったためにスッと講演に入っていくことが出来た。

講演の行われた11月4日当初、「近いうち解散」が取りざたされていた。森先生は現状の政治を巡る状況について語る。逆風の激しい民主党。タカ派度を競った不思議な自民党総裁選。憲法廃棄を謳う石原新党の設立。橋下市長は憲法改正を求める「日本維新の会」を立ち上げた…この混沌とした状況は、本当に国民のためになっているのか、と森先生は疑問を投げかける。

私は初めて聞いた言葉だったのだが、「べからず選挙」と日本の選挙は呼ばれている。戸別訪問、事前運動や演説会などなどの規制。公務員の政治運動の全面禁止。規制づくしの選挙が日本の選挙の実態だと森先生は言う。国民は「観客」と



△ 森 英樹 教授

して選挙を眺める。メディアが煽動し、作られた情報のみが時勢を作る。「観客民主主義」と表現されているようだ。確かに自分自身も「観客」として選挙に関わっていることに愕然とする。

ドイツの情勢に話は移る。ドイツと日本の政党助成のあり方の違いを聞きながら、何が違うのかと思いを馳せていると、「緑の党」や「海賊党」という単語が森先生の口から聞かれた。緑の党は、ドイツで近年勢力を伸ばしている、環境保護を目標としたリベラル政党と認識しているが、海賊党は初めて聞いた。ネットを媒

介として、ネット規制に反対する党で若者から絶大な人気があるとのこと。そして、彼らが台頭してきた背景には政党助成金がある。ドイツでも色々と問題のある政党助成金は、日本では批判もなく野放図に運営されている。その額は、世界で群を抜いて1位なのだそうだ。

講演の最後に、「世論はメディアに引きずられる。これは民主主義なのか」と問題提起をされた森先生。世論と与論。観客として眺めるのではなく、自分たちで喧々諤々論議して政治を主導していくこと、つまり与論の形成が必要であると締められた。

続く対談では、森先生と浦部先生が日本の戦後とドイツの戦後の違いなどを皮切りに、様々なテーマで激論をぶつけられた。ナチスという政党と縁を切ることから再出発したドイツと異なり、日本は天皇制と縁を切れなかった。この事が「戦後責任」を大きく後退させたというお二人の共通認識は私にも理解できた。


また、社民勢力が力を持たない現在の日本の政党バランスについても、両先生



△ 対談する森教授（左）と浦部教授

から警鐘が鳴らされた。第三極を標榜する石原、橋下に対する危機感も語られた。森先生の「憲法を大事に思う政党の橋渡しをしているのが、「九条の会」。改憲の動きは早晚出てくるだろう。そんな状況で「護憲勢力」同士が喧嘩をするのなら、私はドイツに移住したい」という言葉は、冗談とは聞こえなかった。

最後に会場からの質問を受けて、森先生、浦部先生に回答していただき講演会は終了した。政治という、自分の立ち位置に少なからず影響を与えるシステムについて、興味を与えてもらったことに感謝している。憲法との関連についても勉強でき、来るべき選挙に対する心構えにもなり、有意義な時をすごした。(T.M.)

シアター  映画をみよう①

韓国映画『私たちの幸せな時間』を見て

今年3月29日、1年8か月ぶりに死刑が執行され、8月3日にも死刑が執行されたという新聞記事を読み、極刑である「死刑制度」についても、一市民として考えることも必要だと思っていた、ちょう

どそんな時、10月15日（月）に、日本弁護士連合会主催の市民セミナーとして「死刑廃止を考える日」というイベントが開催されることを知り出席しました。そこで上映された韓国映画「私たちの幸せ

な時間」(ソン・ヘソン監督／2006年・韓国)についての感想を述べたいと思います。

簡単にストーリーを記します。3回目の自殺に失敗した自殺願望をもつ元歌手ユジョンが、叔母であるシスター・モニカの誘いで、3人の女性を殺して死刑囚になったユンスと毎週木曜に面会することになり、1日も早い死刑執行を望むユンスに対し、ユジュンは自分に似たものを感じ、ユンスもまた、棘のある言葉ばかりを投げつけるユジョンに、自分に似たものを感じ始める。シーンの合間に、カットバックして裕福な家で育ったユジョンと孤児のユンスの過去の生い立ちを挟みながら、全く違う人生を送って来た2人が、面会を繰り返すうちに互いを思いやるようになり、心の奥に秘めていた深い傷を癒しあえる存在となり、生きていけばまた会えると、生きることの大切さを思うようになる…。ラストシーンは、映画を見て久しぶりに目頭が熱くなるほど感動し、一市民として私も死刑ということを大いに考えさせられました。

特に、カットバックのシーンの一つで、本来死刑囚となる罪を犯した共犯者が主犯で、死刑囚となったユジュンは実は従犯でありながら、獄中でそれを訴えることもせず、死刑を受け入れ、人としての今までの自分自身の「罪」を死刑で償おうとしてしまうシーンが印象に残っています。

職業裁判官でも死刑の宣告をするには、

「本当に死刑でいいかどうか。」を悩むといます。それを一般市民である裁判員も行うとなると、重たすぎる責任と言えるかもしれません。私自身、この映画をきっかけに、社会に生きる一市民として、さらに深く考えたいと思います。

(ドカベン太郎)



『私たちの幸せな時間』

原題『우리들의 행복한 시간』

- ・2006年 韓国作品
- ・2007年 日本公開
- ・上映時間 124分

監督：ソン・ヘソン

原作：コン・ジョン

配給：デスペラード

DVD 販売元：

アミューズソフトエンタテインメント

◇「シアター 映 映画をみよう」では、HuRPの活動に関連するテーマー人権・平和・国際関係などを扱う映画を鑑賞しての感想や映画評を掲載し、映画をエンターテインメントとしてだけでなく、人権について考えたり感じたりするきっかけとして紹介していければと思っています。(不定期掲載)

HuRP 主催イベントのお知らせ

肥田舜太郎さんが語る 「被爆・内部被曝と人権」

1945年、みずからも広島で被爆しながら、内部被曝とたたかい続けてきた医師・肥田舜太郎さん。自分のいのちを人任せにせず、「生きる」ことを真剣に考えようと語りながら、被爆者と向き合ってこられました。

また肥田さんは、人間のいのちを粗末に扱う社会の動きに対して、徹底的にたたかい続けてこられた方でもあります。

人権の出発点は、一人ひとりが自分のいのちを真剣に考え、大切にすること。それを「3.11」で突きつけられた私たちは、私たちの望む社会のあり方を求めていくためのアイデアを、肥田さんのお話を聞きながら、みなさんと語り合いたいと思います。

■開催日時 2012年12月16日(日) 14:00～16:30 ▽資料代500円

■場所 埼玉会館 6B 会議室 JR 浦和駅(西口)下車 徒歩6分

▼要予約

参加希望の方は12月10日(月)までに hurp@hurp.info かファックス(03-6914-0085)にて、お名前・ご連絡先明記の上、お申し込み下さい。先着30名様ご予約時点で受付締切とさせていただきます。ホームページ <http://www.hurp.info> でも詳細チラシを掲載しています！

肥田舜太郎さん

1917(大正6)年、広島生まれ。

1944年より医師として広島陸軍病院に勤務。

1945年8月6日の原爆投下により、自身も被爆しながら、直後より被ばく者治療にあたる。6000人以上の被ばく者治療の経験をふまえて、「ぶらぶら病」と呼ばれる症状や、内部被曝の影響について研究し発言。また、被曝の実相を語り核兵器廃絶を訴える活動も行う。

2011年3月11日以降も、さまざまなメディアでの発言のほか、自身の経験や内部被曝について、また、いのちのまもりかたなど、全国で講演を多く行っている。



著書に、『ヒロシマ・ナガサキを世界へ』『ヒロシマを生きのびて』(以上あけび書房)、『広島の消えた日 増補新版』(影書房)、『内部被曝の脅威』(共著、ちくま新書)など。

【編集後記】▶気づけば年末。今年はHuRP主催イベントで1年の締めくくりを迎えることになる。選挙は期日前投票で済ませるとして、12月16日は肥田先生のお話を拝聴するとともに「いのちについて考える日」にしたい。▷12月10日の世界人権デーを前に11月から人権関連イベントがいろいろ開催されている。12月1日の世界エイズデーに因んで、今月のカットは「レッドリボン」。差別と偏見がなくなることを願って…。(望)
※HuRP通信11月号のお届けが遅れましたことをお詫びいたします。



特定非営利活動法人 人権・平和国際情報センター Human Rights and Peace Information Center Japan
〒171-0014 東京都豊島区池袋2-17-8 丸十ビル402号 TEL & FAX 03-6914-0085
E-mail: hurp@hurp.info URL: <http://www.hurp.info/>